

# なぜ英語が話せないの

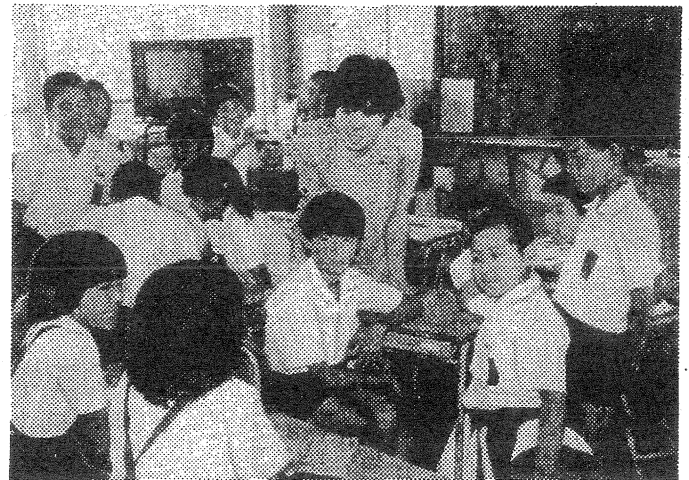
## 会話上達法 第三部

<39>

話す。

例えば、友達の名前を覚えるゲームをする。先生のオルガンに合わせて Can you sing your name to me? (君の名前を私に教えてよの意味) と児童の一人が歌う。この児童から指定された児童は、自分の名前を「かずお、かずお」といった具合に

御幸小(尾花光信校長、児童約九百五十人)の場合、毎週火、二度、歌の調子に合わせて答える。さらに答えた児童は、同じ



桑野先生を囲んで無心に英会話を学ぶ御幸小の児童たち

## 理屈抜きで口に出す

### 母国語学んだ同じ方法

「外国語の習得は、母国語を学んだのと同じ方法でやるのが望ましい。幼い日には、アーアーのような音の期間があり、続いてババ、ママを覚え、少し長しむとハイハイと呼んでいたものが鳥であることを理解する。幼児の頭の中には、言葉より先に物や、経験があり、次第に単語を増やし、より複雑な文章を構成していく。英語の学習も本来は、こうあるべきだ」

かつて会話が全く出来なかった加藤恭子さん(上智大講師)は、その著「こんなふうに英語を学べたら?」の中で、外国語の体験的マスター法を、こんな具合に紹介している。

加藤さんの指摘どおり、語学の習得は無心に学べる若いときほど効果大きい。中学生にな

待てない。各地で幼児や児童を対象にした英会話塾が増加しているのも、このためである。筑後地方では、こつした背景のなか、小学校に「英会話クラブ」をつくる学校が出てきた。また、草分け的な存在ながら、二年前に設置した浮羽郡浮羽町の御幸小に続いて、久留米市の長門石小にもこのほど、小学校の先生が指導する英会話教室が誕生した。

六年生の児童二十五人が一つの教室に集合、大学時代、二カ月ほど米国を生活したことがある桑野妙子先生から、基礎会話を習っている。

「なにしろ、アルファベットはもとより、単語も全く知らない児童が相手ですから、言葉を知らない乳幼児に片言語を教えるのと同じ。理屈抜きで、何回も何回も口に出させるしか方法はありませぬ」と、桑野先生は

歌で他の児童の名前を聞く。クラン員を一巡する際には、全員が質問文を暗記している。また、英語の発音に親しむため「ABCの歌」「メリーさんの羊」などの歌「ABCの歌」などを英語で歌

一方では、身近な単語(本や机、先生、犬など)を少しずつ覚える。簡単なあいさつをお互いに言えるようにする。教室が騒がしくなると、桑野先生は、B

e quiet」(静かになさい)と注意する。同校には、野球、手芸、演劇部……と多彩なクラブがある。英会話クラブ員の赤司一夫君(五年)に内部の動機を聞くと「おもしろいから」と屈託のない答え。佐々木太郎君(同)の答えは「本当によかった」

「息子もおかげで中学に行っても英語が好きで……」と言われたいように、テープで英会話を勉強する子も出た。

「息子もおかげで中学に行っても英語が好きで……」と言われたいように、テープで英会話を勉強する子も出た。